

ロマネスク

太宰治

青空文庫

仙術太郎

むかし津輕の国、神かなぎ木村にくわがた鍛形そうすけ惣助という庄屋がいた。四十九歳で、はじめて一子を得た。男の子であつた。太郎と名づけた。生れるとすぐ大きいあくびをした。惣助はそのあくびの大きすぎるのを気に病み、祝辞を述べにやつて来るしんせき親戚の者たちへ肩身のせまい思いをした。惣助の懸けねん念はそろそろと的中しはじめた。太郎は母はは者人じゃひとの乳房にもみずからすすんでしやぶりつくようなことはなく、母者人のふところの中にいて口をたいぎそうにあけたまま乳房の口への接触をいつまでも待っていた。張はりこ子

の虎をあてがわれてもそれをいじくりまわすことはなく、ゆらゆら動く虎の頭を退屈そうに眺めているだけであつた。朝、眼をさましてからもあわてて寢床から這はい出すようなことはなく、二時間ほどは眼をつぶつて眠つたふりをしてるのである。かるがるしきからだの仕草をきらう精神を持っていたのであつた。三歳のとき、鳥ちよつと渡した事件を起し、その事件のお蔭で鍬形太郎の名前が村のひとたちのあいだに少しひろまつた。それは新聞の事件でないゆえ、それだけほんとうの事件であつた。太郎がどこまでも歩いたのである。

春のはじめのことであつた。夜、太郎は母者人のふところから音もたてずにころがり出た。ころころと土間へころげ落ち、それ

から戸外へまろび出た。戸外へ出てから、しやんと立ちあがったのである。惣助も、また母者人も、それを知らずに眠っていた。

満月が太郎のすぐ額のうえに浮んでいた。満月の輪廓りんかくはにじんでいた。めだかの模様の襦袢じゆばんに慈姑くわいの模様の綿入れ胴衣を重ねて着ている太郎は、はだしのままで村の馬糞ばふんだらけの砂利道じやりみちを東へ歩いた。ねむたげに眼を半分として小さい息をせわしなく吐きながら歩いた。

あく翌る朝、村は騒動であつた。三歳の太郎が村からたつぷり一里もはなれている湯流山ゆながれやまの、林檎畑りんごばたけのまんまんなかでこともなげに寝込んでいたからであつた。湯流山は氷のかけらが溶けかけているような形で、峯みねには三つのなだらかな起伏があり西端は流

れたようにゆるやかな傾斜をなしていた。百米メートルくらいの高さであった。太郎がどうしてそんな山の中にまで行き着けたのか、その訳は不明であった。いや、太郎がひとり登っていったにちがいないのだ。けれどもなぜ登っていったのかその訳がわからなかった。

発見者である蕨わらび取りの娘の手籠てかごにいれられ、ゆられゆられしながら太郎は村へ帰って来た。手籠てかごのなかを覗のぞいてみた村のひとたちは皆、眉のあいだに黒い油しわぎった皺しわをよせて、天狗てんぐ、天狗てんぐとななずき合あった。惣助はわが子の無事である姿を見て、これは、これは、と言いった。困こったとも言いえなかつたし、よかつたとも言いえなかつた。母者人はそんなに取り乱みだしていいなかつた。太郎を抱かき

あげ、蕨取りの娘の手籠には太郎のかわりに手拭地を一反たんいれて
やって、それから土間へ大きな盥たらいを持ち出しお湯をなみなみとい
れ、太郎のからだを静かに洗った。太郎のからだはちつとも汚れ
ていなかった。丸々と白くふとつていた。惣助は盥のまわりをは
げしくうろついて歩き、とうとう盥に蹴けつまず躓すいて盥のお湯を土間
いちめんにおびただしくぶちまけ母者人に叱ちられた。惣助はそれ
でも盥の傍から離れず母者人の肩越しに太郎の顔を覗のぞき、太郎、
なに見た、太郎、なに見た、と言いつづけた。太郎はあくびをい
くつもいくつもしてからタアナカムダアチイナエエというかたこ
とを叫んだ。

惣助は夜、寝てからやっとこのかたことの意味をさとつた。た

みのかまどはにぎわいにけり。発見！ 惣助は寝たままびしやつ
と膝ひざがしら頭を打とうとしたが、重い掛蒲団かけぶとんに邪魔され、臍へそのあ
たりを打って痛い思いをした。惣助は考える。庄屋のせがれは庄
屋の親だわ。三歳にしてもうはや民のかまどに心をつかう。あら
有難の光明や。この子は湯流山のいただきから神柳木村の朝の景
色を見おろしたにちがいない。そのとき家々のかまどから立ちの
ぼる煙は、ほやほやとにぎわっていたとな。あら殊しゆしよう勝しょうの超世
の本願や。この子はなんと授かりものじゃ。御大切にしなければ。
惣助はそつと起きあがり、腕をのばして隣りの床にひとりで寝て
いる太郎の掛蒲団をていねいに直してやった。それからもつと腕
をのばしてそのまた隣りの床に寝ている母者人の掛蒲団を少しば

かり乱暴に直してやった。母者人は寝相がわるかった。惣助は母者人の寝相を見ないようにして、わざと顔をきつくそむけながら眩つふやいた。これは太郎の産みの親じゃ。御大切にしなければ。

太郎の予言は当った。そのとしの春には村のごとく、林檎畑にすばらしく大きい薄紅の花が咲きそろい、十里はなれた御城下町にまで匂いを送った。秋にはもつとよいことが起った。林檎の果実が手毬てまりくらいに大きく珊瑚さんごくらいに赤く、桐きりの実みたいに鈴成りに成ったのである。こころみにそのひとつをちぎりとり歯にあてると、果実の肉がはち切れるほど水気を持っていることとて歯をあてたとたんにはほんと音高く割れ冷たい水がほとばしり出て鼻から頬までびしょ濡ぬれにしてしまうほどであった。あくるとし

の元旦には、もつとめでたいことが起つた。千羽の鶴が東の空から飛来し、村のひとたちが、あれよ、あれよと口々に騒ぎたてているまに、千羽の鶴は元旦の青空の中をゆつたりと泳ぎまわりやがて西のかたに飛び去つた。そのとしの秋にもまた稲の穂に穂がみのり林檎も前年に負けずに枝のたおたおするほどかたまつて結実したのである。村はうるおいはじめた。惣助は予言者としての太郎の能力をしかと信じた。けれどもそれを村のひとたちに言いふらしてあるくことは控えていた。それは親馬鹿という嘲笑を得たくない心からであらうか。ひよつとすると何かもつと軽はずみな、ひともうけしようという下心からであつたかも知れぬ。

幼いころの神童は、二三年してようやく邪道におちた。いつし

か太郎は、村のひとたちからなまけものという名前をつけられていた。惣助もそう言われるのを仕方がないと思いはじめたのである。太郎は六歳になっても七歳になってもほかの子供たちのように野原や田圃たんぼや河原へ出て遊ぼうとはしなかった。夏ならば、部屋いへの窓べりに頬杖ついて外の景色を眺めていた。冬ならば、炉いろり辺へに坐つて燃えあがる焚火たきびの焰ほのおを眺めていた。なぞなぞが好きであった。或る冬の夜、太郎は炉辺に行儀わるく寝そべりながら、かたわらの惣助の顔を薄目つかつて見あげ、ゆつくりした口調でなぞなぞを掛けた。水のなかにはいつでも濡れないものはなんじやろ。惣助は首を三度ほど振つて考えて、判らぬの、と答えた。太郎はものうそうに眼をかるくとしてから教えた。影じやがのう。

惣助はいよいよ太郎をいまいましく思いはじめた。これは馬鹿ではないか。阿呆なのにながめない。村のひとたちの言うように、やっぱしただのなまけものじやったわ。

太郎が十歳になったとしの秋、村は大洪水に襲われた。村の北端をゆるゆると流れていた三間ほどの幅の神柳木川が、ひとつき続いた雨のために怒りだしたのである。水源の濁り水は大渦小渦を巻きながらそろそろふくれあがつて六本の支流を合せてたちまち太り、身を躍らせて山を韋駄いだてん天ばしりに駈け下りみちみち何百本もの材木をかつさらう川岸の檜かしや樅もみや白楊はこやなぎの大木を根こそぎ抜き取り押し流し、麓ふもとの淵よどで澱んでそれから一挙に村の橋に突きあたって平気でそれをぶちこわし土手を破って大海のよ

うにひろがり、家々の土台石を舐め豚を泳がせ刈りとったばかりの一方にあまる稲坊主を浮かせてだぶりだぶりど浪打った。それから五日目に雨がやんで、十日目にようやく水がひきはじめ、二十日目ころには神柳木川は三間ほどの幅で村の北端をゆるゆると流れていた。

村のひとたちは毎夜毎夜あちこちの家にとかたまりずつになつて相談し合つた。相談の結論はいつも同じであつた。おらは餓え死したくねえじや。その結論はいつも相談の出発点になつた。村のひとたちは翌る夜また同じ相談をはじめなければいけなかつた。そうしてまたまた餓え死したくねえという結論を得て散会した。翌る夜は更に相談をし合つた。そうして結論は同じであつた。

相談は果つるところなかつたのである。村が乱れて義民があらわれた。十歳の太郎が或る日、両腕で頭をかかえこみ溜息をついている父親の惣助にむかつて、意見を述べた。これは簡単に解決がつくと思う。お城へ行つてじきじき殿様へ救済をお願いすればいいのじゃ。おれが行く。惣助は、やあ、と突拍子もない歓声をあげた。それからすぐ、これはかるはずみなことをしたと気づいたらしく一旦ほどきかけた両手をまた頭のうしろに組み合せてしかめつらをして見せた。お前は子供だからそう簡単に考えるけれども、大人はそうは考えない。直訴じきんてはまかりまちがえば命とりじや。めつそうもないこと。やめろ。やめろ。その夜、太郎はふところ手してぶらつと外へ出て、そのまますたと御城下町へ急いだ。

誰も知らなかった。

直訴は成功した。太郎の運がよかつたからである。命をとられなかつたばかりかごほうびをさえ貫もらつた。ときの殿様が法律をきれいに忘れていたからでもあろう。村はおかげで全滅をのがれ、あくる年からまたうるおいはじめたのである。

村のひとたちは、それでも二三年のあいだは太郎をほめていた。二三年がすぎると忘れてしまった。庄屋の阿呆様とは太郎の名前であつた。太郎は毎日のように蔵の中にはいつて惣助の蔵書を手当り次第に読んでいた。ときどき怪けしからぬ絵本を見つけた。それでも平気な顔して読んでいった。

そのうちに仙術の本を見つけたのである。これを最も熱心に読

みふけた。縦横十文字に読みふけた。蔵の中で一年ほども修行して、ようやく鼠と鷲わしと蛇へびになる法を覚えこんだ。鼠になって蔵の中をかけめぐり、ときどき立ちどまってちゆうちゆうと鳴いてみた。鷲になって、蔵の窓から翼をひろげて飛びあがり、心ゆくまで大空を逍遙しょうようした。蛇になって、蔵の床下にしのびいりくも蜘蛛の巣をさけながら、ひやひやした日蔭の草を腹のうろこで踏みわけ踏みわけして歩いてみた。ほどなく、かまきりになる法をも体得したけれど、これはただその姿になるだけのことであつて、べつだん面白くもなんともなかつた。

惣助はもはやわが子に絶望していた。それでも負け惜みしてこゝろ母者人に告げたのである。な、余りできすぎたのじやよ。太郎

は十六歳で恋をした。相手は隣りの油屋の娘で、笛を吹くのが上手であつた。太郎は蔵の中で鼠や蛇のすがたをしたままその笛の音を聞くことを好んだ。あわれ、あの娘に惚ほれられたいものじゃ。津軽いちばんのよい男になりたいものじゃ。太郎はおのれの仙術でもつて、よい男になるようになるように念じはじめた。十日目にその念願を成じょうじゆ就じゆすることができたのである。

太郎は鏡の中をおそろおそろ覗いてみて、おどろいた。色が抜けるように白く、頬はしもぶくれでもち肌であつた。眼はあくまでも細く、口くちひげ鬚ひげがたらりと生えていた。天平時代の仏像の顔であつて、しかも股間の逸いちもつ物もつまで古風にだらりとふやけていたのである。太郎は落胆した。仙術の本が古すぎたのであつた。天平

のころの本であつたのである。このような有様では詮ないことじや。やり直そう。ふたたび法のよりをもどそうとしたのだが駄目であつた。おのれひとりの慾望から好き勝手な法を行つた場合には、よかれあしかれ身体にくつついてしまつて、どうしようもなくなるものだ。太郎は三日も四日も空しい努力をして五日目にあきらめた。このような古風な顔では、どうせ女には好かれまいが、けれども世の中には物好きが居らぬものでもあるまい。仙術の法力を失つた太郎は、しもぶくれの顔に口鬚をたらりと生やしたまま蔵から出て来た。

あいた口のふさがらずにいる両親へ一ぶしじゅうの訳をあかし、ようやく納得させてその口を閉じさせた。このようなあさましい

面白くない、面白くないという呪文を何十ぺん何百ぺんとなくくりかえしくりかえし低音でとなえ、ついに無我の境地にはいりこむことにあつたという。

喧嘩次郎兵衛

むかし東海道三島の宿に、鹿間屋逸平という男がいた。曾祖父の代より酒の醸造をもつて業としていた。酒はその醸造主のひとがらを映すものと言われている。鹿間屋の酒はあくまでも澄み、しかもなかなか辛口であつた。酒の名は、みずぐるま水車と呼ばれた。子供が十四人あつた。男の子が六人。女の子が八人。長男は世事

に鈍く、したがって逸平の指図どおりに商売を第一として生きていた。おのれの思想に自信がなく、それでもときどきは父親にむかつて何か意見を言いだすことがあったけれども、言葉のなかばでもうはや丸つきり自信を失い、そうかとも思われますが、しかしこれとても間違いだらけであるとしか思われませんし、きつと間違っていると思います。父上はどうお考えでしょうか、なんだか間違っているようでございます、とやはり言いにくそうにその意見を打ち消すのであった。逸平は簡単に答える。間違つとるじや。

けれども次男の次郎兵衛となると少し様子がちがっていた。彼の気質の中には政治家の泣き言の意味でない本来の意味の是々非

々の態度を示そうとする傾向があつた。それがために彼は三島の宿のひとたちから、ならずもの、と呼ばれて不潔がられていた。次郎兵衛は商人根性というものをきらつた。世の中はそろばんでない。価のないものこそ貴いのだ、と確信して毎日のように酒を呑んだ。酒を呑むにしても、不当の利益をむさぼっているのをこの眼でたしかにいままで見て来た彼の家の酒を口にすることは御免であつた。もしあやまつて呑みくだした場合にはすぐさま喉へ手をつっこみ無理にもそれを吐きだした。来る日も来る日も次郎兵衛は三島のまちをひとりして呑みあるいていたのであつたが、父親の逸平は別段それをとがめだてしようとしなかつた。頭の澄んだ男であつたからである。あまたの子供のなかにひとりくらい

の馬鹿がいたほうが、かえって生彩があつてよいと思つていた。それに逸平は三島の火消しの頭かしらをつとめていたので、ゆくゆくは次郎兵衛にこの名誉職をゆずつてやろうというたくらみもあり、次郎兵衛がこれからもますます馬のように暴れまわつてくれたならそれだけ将来の火消し頭としての資格もそなわつて来ることだという遠い見透しから、次郎兵衛の放ほうらつ埒も見て見ぬふりをしてやつたわけであつた。

次郎兵衛は、二十二歳の夏にぜひとも喧嘩の上手になつてやろうと決心したのであつたが、それはこんな訳からであつた。

三島大社では毎年、八月の十五日にお祭りがあり、宿場のひとたちは勿もちろん論、沼津の漁村や伊豆の山々から何万というひとがて

んでに団扇うちわを腰にはさみ大社さしてぞろぞろ集つて来るのであつた。三島大社のお祭りの日には、きつと雨が降るとむかしのむかしからきまつていた。三島のひとたちは派手好きであるから、その雨の中で団扇を使い、踊屋台がとおり山車だしがとおり花火があがるのを、びつしより濡れて寒いのを堪えに堪えながら見物するのである。

次郎兵衛が二十二歳のときのお祭りの日は、珍らしく晴れていた。青空には鳶とびが一羽びよろびよろ鳴きながら舞つていて、参さんけ詣いのひとたちは大社様を拜んでからそのつぎに青空と鳶を拜んだ。ひる少しすぎたころ、だしぬけに黒雲が東北の空の隅からむくむくあらわれ二三度またたいているうちにもうはや三島は薄暗

くなつてしまい、水気をふくんだ重たい風が地を這はいまわるとそれが合図とみえて大粒の水滴が天からぽたぽたこぼれ落ち、やがてこらえかねたかひと思いに大雨となつた。次郎兵衛は大社の大鳥居のまえの居酒屋で酒を呑みながら、外の雨脚と小走りに走つて通る様様の女の姿を眺めていた。そのうちにふと腰を浮かしかけたのである。知人を見つけたからであつた。彼の家のおむかいに住まっている習字のお師匠ししやうの娘であつた。赤い花模様の重たげな着物を着て五六歩はしつてはまたあるき五六歩はしつてはまたあるきしていた。次郎兵衛は居酒屋ののれんをぱつとはじいて外へ出て、傘をお持ちなさい、と言葉をかけた。着物が濡れると大変です。娘は立ちどまって細い頸をゆっくりねじ曲げ、次郎兵

衛の姿を見るとやわらかいまつ白な頬をあからめた。お待ち。そう言い置いて次郎兵衛は居酒屋へ引返して亭主を大声で叱りつけながら番傘を一ぼん借りたのである。やいお師匠さんの娘。おまえの親爺にしろおふくろにしろ、またおまえにしろ、おれをならずもの呑んだくれのわるい悪者と思つているにちがいない。ところがどうじゃ。おれはああ気の毒なと思つたならこうして傘でもなんでもめんどうしてやるほどの男なのだ。ざまを見ろ。ふたたびのれんをはじいて外へ出てみると、娘はいなくていつそうさかんな雨脚と、押し合いへし合いしながら走つて通るひとの流れとだけであった。よう、よう、よう、ようと居酒屋のなかから嘲ちやうろう弄ろうの聲が聞えた。六七人のならずもの声なのである。

番傘を右手にささげ持ちながら次郎兵衛は考える。あああ。喧嘩の上手になりたいな。人間、こんな莫迦ばかげた目にあつたときには理窟もなくでもないものだ。人に触れたら、人を斬る。馬に触れたら、馬を斬る。それがよいのだ。その日から三年のあいだ次郎兵衛はこつそり喧嘩の修行をした。

喧嘩は度胸である。次郎兵衛は度胸を酒でこしらえた。次郎兵衛の酒はいよいよ量がふえて、眼はだんだんと死魚の眼のように冷くかすみ、額には三本の油ぎつた横皺よこじわが生じ、どうやらふてぶてしい面貌になつてしまった。煙管きせるを口元へ持つて行くのにも、腕をうしろから大廻しに廻して持つて行って、やがてすぱりと一服すうのである。度胸のすわつた男に見えた。

つぎにはものの言いようである。奥のしれぬようなぼそぼそ声で言おうと思つた。喧嘩のまえには何かしら気のきいた台詞を言せりふわれないといけないことになっているが、次郎兵衛はその台詞の選択に苦勞をした。型でものを言つては實際の感じがこもらぬ。こういう型はずれの台詞をえらんだ。おまえ、間違つてはいませんか。冗談じゃないかしら。おまえのその鼻の先が紫いろに腫はれあがるとおかしく見えますよ。なおすのに百日もかかる。なんだか間違つていると思ひます。これをいつでもすらすらい出せるように、毎夜、寝てから三十ペンずつひくく誦した。またこれを言つているあいだ口をまげたり、必要以上に眼をぎらぎらさせたりせずにはほとんど微笑ほほえむようにしていたものだ、その練習をも

怠らなかつた。

これで準備はできた。いよいよ喧嘩の修行であつた。次郎兵衛は武器を持つことをきらつた。武器の力で勝つたとてそれは男でない。素手の力で勝たないことには、おのれの心がすすきりしない。まずこぶしの作りかたから研究した。親指をこぶしの外へ出して置くと親指をくじかれるおそれがある。次郎兵衛はいろいろと研究したあげく、こぶしの中に親指をかくしてほかの四本の指の第一関節の背をきつちりすきまなく並べてみた。ひどく頑丈そうなこぶしができあがつた。このきつちり並んだ第一関節の背で自分の膝頭をとんとついでみると、こぶしは少しも痛くなくてそのかわりに膝頭のほうがあつと飛びあがるほど痛かつた。これは

発見であつた。次郎兵衛はつきにその第一関節の背の皮を厚く固くすることを計画した。朝、眼をさますとすぐに彼の新案のこぶしでもつて枕元の煙草盆をひとつなぐ殴つた。まちを歩きながら、みちみちの土塀や板塀を殴つた。居酒屋の卓を殴つた。家の炉縁を殴つた。この修行に一年を費やした。煙草盆がばらばらにこわれ土塀や板塀に無数の大小の穴があき、居酒屋の卓に罅ひびができ、家の炉縁がハイカラなくらいでこぼこになつたころ、次郎兵衛はやつとおのれのこぶしの固さに自信を得た。この修行のあいだに次郎兵衛は殴りかたにもこつのあることを発見した。すなわち腕を、横から大廻しに廻して殴るよりは腋下からピストンのようにまっすぐに突きだして殴つたほうが約三倍の効果があるということだ

あつた。まつすぐに突きだす途中で腕を内側に半廻転ほどひねつたなら更に四倍くらいの効力があるということをも知つた。腕が螺旋らせんのように相手の肉体へきりきり食いいるというわけであつた。つぎの一年は家の裏手にあたる国分寺跡の松林の中で修行をした。人の形をした五尺四五寸の高さの枯れた根株を殴るのであつた。次郎兵衛はおのれのからだをすみからすみまで殴つてみて、眉間みけんと水落ちみぞおが一番いたいという事実を知らされた。尚、むかしから言い伝えられている男の急所をも一応は考えてみたけれども、これはやはり下品な気がして、傲邁ごうまいな男の覗ねらうところではないと思つた。むこうずねもまた相当に痛いことを知つたが、これは足で蹴けるのに都合のよいところであつて、次郎兵衛は喧嘩に足を

使うことは卑怯ひきようでもありうしろめたくもあると思い、もつぱら眉間と水落ちを覗ねらうことにきめたのである。枯れた根株の、眉間と水落ちに相当する高さの個処へ小刀で三角の印をつけ、毎日毎日、ばかりばかりと殴りつけた。おまえ、間違つてはいませんか。冗談じゃないかしら。おまえのその鼻の先が紫いろに腫れあがるとおかしく見えますよ。なおすのに百日もかかる。なんだか間違つていると思います。とたんにばかりと眉間を殴る。左手は水落ちを。

一年の修行ののち、枯木の三角の印は腕くらの深さに丸くくぼんだ。次郎兵衛は考えた。いまは百発百中である。けれどもまだまだ安心はできない。相手はこの根株のようにいつもだまつて

立ちつくしてはいない。動いているのだ。次郎兵衛は三島のまちなほとんどここの曲りかどにでもある水車へ眼をつけた。富士の麓ふもとの雪が溶けて数十条の水量のたつぷりな澄んだ小川となり、三島の家々の土台下や縁先や庭の中をとおって流れていて苔こけの生えた水車がそのたくさんの小川の要処要処でゆっくりゆっくり廻っていた。次郎兵衛は夜、酒を呑んでのかえりみち必ずひとつの水車を征伐した。廻りめぐっている水車の十六枚の板の舌を、順々にほかりほかりと殴るのである。はじめは見当がむずかしくてなかなかうまく行かなかつたのであるが、しだいに三島のまちで破れた舌をだらりとさげたまま休んでいる水車を見かけることが多くなった。

次郎兵衛はしばしば小川で水を浴びた。底ふかくもぐってじつとしてゐることもあつた。喧嘩さいちゆうに誤つて足をすべらし小川へ転落した場合のことを考慮したのであつた。小川がまちじゆうを流れてゐるのだから、あるいはそんな場合もあるであろう。さらし木綿の腹帯を更にぎゅつと強く巻きしめた。酒を多く腹へいれさせまいという用心からであつた。酔いどれたならば足がふらつき思わぬ不覚をとることもある。三年経つた。大社のお祭りが三度来て、三度すぎた。修行がおわつた。次郎兵衛の風貌はいよいよどっしりとして鈍重になつた。首を左か右へねじむけてしまふのにさえ一分間かかつた。

肉親は血のつながりのおかげで敏感である。父親の逸平は、次

郎兵衛の修行を見抜いた。何を修行したかは知らなかったけれど、何かしら大物になったらしいということにだけは感づいた。逸平はまえからのたくらみを実行した。次郎兵衛に火消し頭の名譽職を受けつがせたのである。次郎兵衛はそのなんだか訳のわからぬ重々しげなものごしによって多くの火消したちの信賴を得た。かしら、かしらとうやまわれるばかりで喧嘩の機会はとんとなかった。ひよつとしたらもうこれは生涯、喧嘩をせず^にこのまま死んで行くのかも知れないと若いかしらは味気ない思^いをしていた。ねりにねりあげた両腕は夜ごとにむずかゆくなり、わびしい気持ちでぽりぽりひつ搔^かいた。力のやり場に困^{つて}身もだえの果、とうとうやけくそな悪^{いたずら}戯^{ごころ}心を起し背中いっぱいに刺^{いれずみ}青をした。

直径五寸ほどの真紅の薔薇ばらの花を、鯖さばに似た細長い五匹の魚とがが尖とがつたくちばしで四方からつついている模様であつた。背中から胸にかけて青い小波さざなみがいちめんうごいていた。この刺青のため
に次郎兵衛はいよいよ東海道にかくれなき男となり、火消したちは勿論、宿場のならずものにさえうやまわれ、もうはや喧嘩の望みは絶えてしまった。次郎兵衛は、これはやりきれないと思つた。
けれども機会は思いがけなくやつて来た。そのころ三島の宿に、鹿間屋と肩を並べてともに酒つくりを競っていた陣州屋丈六という金持ちがいた。ここの酒はいくぶん舌つたるく、色あいが濃厚であつた。丈六もまた酒によく似て、四人の妾めかけを持つてゐるのにそれでも不足で五人目の妾を持つとうとして様様の工夫をし

ていた。鷹たかの白羽の矢が次郎兵衛の家の屋根を素通りしてそのおむかひの習字のお師匠の詫わび住ずまいしている家の屋根のぺんぺん草をかきわけてぐさとつきささったのである。お師匠はかるがるとは返事をしなかった。二度、切腹をしかけては家人に見つけられて失敗したほどであった。次郎兵衛はその噂を聞いて腕の鳴るのを覚えた。機会を狙ったのである。

三み月つき目に機会がやって来た。十二月のはじめ、三島に珍らしい大雪が降った。日の暮れかたからちらちらしはじめ間もなくおおいきい牡丹雪ぼたんゆきにかわり三寸くらい積ったころ、宿場の六個はんしの半鐘よゆうが一時に鳴った。火事である。次郎兵衛はゆったりゆったり家を出た。陣州屋の隣りの畳屋が気の毒にも燃えあがっていた。

数千の火の玉小僧が列をなして畳屋の屋根のうえで舞い狂い、火の粉が松の花粉のように噴出してはひろがりひろがっては四方の空に遠く飛散した。ときたま黒煙が海坊主のようにのっそりあらわれ屋根全体をおおいかくした。降りしきる牡丹雪は焰ほのおにいろどられ、いつそう重たげにもつたいなげに見えた。火消したちは、陣州屋と議論をはじめていた。陣州屋は自分の家へ水をいれるのはまっぴらであると言い張り、はやく隣りの畳屋の棟をたたき落して火をしずめたらよいと命令した。火消したちはそれは火消しの法にそむくと言つて反駁はんぱくしたのである。そこへ次郎兵衛があらわれた。陣州屋さん。次郎兵衛はできるだけ低い声で、しかもほとんど微笑むようにして言いだした。おまえ、間違つてはいま

せんか。冗談じゃないかしら。陣州屋はだしぬけに言葉をはさんだ。これは鹿間屋の若旦那、へっへ、冗談です、まったくの酔すいき興ようです、ささ、ぞんぶんに水をおいれ下さい。喧嘩にはならなかつた。次郎兵衛は仕方なく火事を眺めた。喧嘩にはならなかつたけれどこのことで次郎兵衛はまたまた男をあげてしまった。火事のあかりにてらされながら陣州屋をたしなめていたときの次郎兵衛のまっかな両頬には十片ひらあまりの牡丹雪が消えもせずにはばりついでいてその有様は神様のように恐ろしかったというのは、その後ながいあいだの火消したちの語り草であつた。

その翌あくる年の二月のよい日に、次郎兵衛は宿場のはずれに新居をかまえた。六畳と四畳半と三畳と三間あるほかに八畳の裏二階

がありそこから富士がまつすぐに眺められた。三月の更によい日に習字のお師匠の娘が花嫁としてこの新居にむかえられた。その夜、火消したちは次郎兵衛の新居にぎっしりつまつて祝い酒を呑み、ひとりずつ順々に隠し芸をして夜を更ふかしいよいよ翌朝になつてやつとおしまいのひとりが二枚の皿の手品をやつて皆の泥酔と熟睡の眼をごまかし或る一隅からのぱちぱちという喝かつさい采でもつて報いられ、祝賀の宴はおわつた。

次郎兵衛は、これはまたこれで結構なことになちがいないのだらう、となま悟りしてきよとんとした一日一日を送つていた。父親の逸平もまた、これで一段落、と呟つぶやいてはほんきせると煙管を吐とげつぼう月峯にはたいていた。けれども逸平の澄んだ頭脳でもつてしてさえ思

い及ばなかつた悲しいことがらが起つた。結婚してかれこれ二月目の晩に、次郎兵衛は花嫁の酌しやくで酒を呑みながら、おれは喧嘩が強いのだよ、喧嘩をするにはの、こうして右手で眉間を殴りさ、こうして左手で水落ちを殴るのだよ。ほんのじやれてやってみせたことであつたが、花嫁はころりところんで死んだ。やはり打ちどころがよかつたのであろう。次郎兵衛は重い罪にとわれ、牢屋へいれられた。ものの上手のすぎた罰である。次郎兵衛は牢屋へはいつてからもそのどこやら落ちつきはらつた様子のために役人から馬鹿にはされなかつたし、また同室の罪人たちからは牢名主としてあがめられた。ほかの罪人たちよりは一段と高いところに坐らされながら、次郎兵衛は彼の自作の都々逸どどいつとも念仏ともつか

ぬ歌を、あわれなふしで口ずさんでいた。

岩かさやに囁く

頬をあからめつつ

おれは強いのだよ

岩は答えなかつた

嘘の三郎

むかし江戸深川に原宮黄村という男やもめの学者がいた。支那の宗教にくわしかつた。一子があり、三郎と呼ばれた。ひとり息子なのに三郎と名づけるとは流石さすがに学者らしくひねったものだ。

近所の取沙汰であつた。どうしてそれが学者らしいひねりかたであるかは誰にも判らなかつた。そこが学者であるということになつていた。近所での黄村の評判はあまりよくなかつた。極端に吝りんしよくであるときかれていた。ごはんをたべてから必ずそれをきつちり半分もどして、それでもつて糊のりをこしらえるという噂さえあつた。

三郎の嘘うその花はこの黄村の吝うそから芽生えた。八歳になるまでは一銭の小使いも与えられず、支那の君子人の言葉を暗あんしよう誦みすることだけを強いられた。三郎はその支那の君子人の言葉を水みず漬づけすすりあげながら呟つぶやき呟つぶやき、部屋部屋の柱や壁の釘くぎをぷすぷすと抜いて歩いた。釘が十本たまれば、近くの屑屋へ持つて行つ

て一銭か二銭で売却した。花林糖かりんとうを買うのである。あとになつて父の蔵書がさらに十倍くらいの良い値で売れることを屑屋から教わり、一冊二冊と持ち出し、六冊目に父に発見された。父は涙をふるつてこの盜癖のある子を折檻せつかんした。こぶしでつづけさまに三つほど三郎の頭を殴り、それから言った。これ以上の折檻は、お前のためにもわしのためにもいたずらに空腹を覚えさせるだけのことだ。それゆえ折檻はこれだけにしてやめる。そこへ坐れ。三郎は泣く泣く悔悟かいごをちかわされた。三郎にとって、これが嘘のしはじめであつた。

そのとしの夏、三郎は隣家の愛犬を殺した。愛犬は狎ちんであつた。夜、狎はけたたましく吠えたてた。ながい遠吠えやら、きやんき

やんというせわしない悲鳴やら、苦痛に堪えかねたような大げさな唸り^{うな}声やら、様様の鳴き声をまぜて騒ぎたてた。一時間くらい鳴きつづけたころ、父の黄村は、傍に寝ている三郎へ声をかけた。見て来い。三郎は先刻より頭をもたげ眼をぱちぱちさせながら聞き耳をたてていたのであった。起きあがって雨戸を繰りあげ、見ると隣りの家の竹垣にむすびつけられている狛が、からだを土にこすりつけて身悶^{みもた}えしていた。三郎は、騒ぐな、と言って叱った。狛は三郎の姿をみとめて、これ見よがしに土にまろび竹垣を噛み、ひとしきり狂乱の姿をよそおい、きやんきやんと一そう高く鳴き叫んだ。三郎は狛の甘ったれた精神にむかむか憎悪を覚えたのである。騒ぐな、騒ぐな、と息をつめたような声で言ってから、庭

へ飛び降り小石を拾い、はつしとぶつつけた。狎の頭部に命中した。きやんと一声するどく鳴いてから狎の白い小さいからだぐるくると独楽こまのように廻つて、ぱたとたおれた。死んだのである。雨戸をしめて寢床へはいつてから、父は眠たげな声でたずねた。どうしたのじゃ。三郎は蒲団ふとんを頭からかぶつたままで答えた。鳴きやみました。病氣らしゅうございます。あしたあたり死ぬかも知れません。

そのとしの秋、三郎はひとを殺した。言問橋ことといばしから遊び仲間を隅田川へ突き落したのである。直接の理由はなかつた。ピストルを自分の耳にぶつ放したい発作とよく似た発作におそわれたのであつた。突きおとされた豆腐屋の末っ子は落下しながら細長い両

脚で家鴨あひるのように三度ゆるく空気を搔くようにうごかして、ぼし
やつと水面へ落ちた。波紋が流れにしたがつて一間ほど川下のほ
うへ移動してから波紋のまんなかに片手がひよいと出た。こぶし
をきつく握っていた。すぐひっこんだ。波紋は崩れながら流れた。
三郎はそれを見とどけてしまつてから、大声をたてて泣き叫んだ。
人々は集り、三郎の泣き泣き指す箇所を見て事のなりゆきをさと
つた。よく知らせてくれた。お前の朋輩ほうばいが落ちたのか。泣くで
ない、すぐ助けてやる。よく知らせてくれた。ひとりの合点の早
い男がそう言つて三郎の肩を軽くたたいた。そのうちに人々の中
の泳ぎに自信のある男が三人、競争して大川へ飛び込み、おのお
の自分の泳ぎの型を誇りながら豆腐屋の末っ子を捜しはじめた。

三人ともあまり自分の泳ぎの姿を気にしすぎて、そのために子供を捜しあるくのがおろそかになり、ようやく捜しあてたものは全くの死骸しがいであつた。

三郎はなんともなかつた。豆腐屋の葬儀には彼も父の黄村とともに参列した。十歳十一歳となるにつれて、この誰にも知られぬ犯罪の思い出が三郎を苦しめはじめた。こういう犯罪が三郎の嘘の花をいよいよ美事にひらかせた。ひとに嘘をつき、おのれに嘘をつき、ひたすら自分の犯罪をこの世の中から消し、またおのれの心から消そうと努め、長ずるに及んでいよいよ嘘のかたまりになつた。

二十歳の三郎は神妙な内気な青年になつていた。お盆の来るご

とに亡き母の思い出を溜息ためいきつきながらひとに語り、近所近辺の同情を集めた。三郎は母を知らなかった。彼が生れ落ちるとすぐ母はそれと交代に死んだのである。いまだかつて母を思つてみたことさえなかつたのである。いよいよ嘘が上手になつた。黄村のところへ教えを受けに来ている二三の書生たちに手紙の代筆をしてやった。親元へ送金を願う手紙を最も得意としていた。例えばこんな工合であつた。謹啓、よもの景色云々と書きだして、御尊父様には御変りもこれなく候そうろうや、と虚心にお伺い申しあげ、それからすぐ用事を書くのであつた。はじめお世辞たらたら書き認したためて、さて、金を送つて下されと言いだすのは下手なのであつた。はじめのたらたらのお世辞がその最後の用事の一言でもつて瓦解がかい

し、いかにもさもしく汚く見えるものである。それゆえ、勇気を
出して少しも早くひと思いに用事にとりかかるのであった。なる
べく簡明なほうがよい。このたびわが塾に於いて詩経の講義がは
じまるのであるが、この教科書は坊間の書肆より求むれば二十
二円である。けれども黄村先生は書生たちの経済力を考慮し直接
に支那へ注文して下さることと相成った。実費十五円八十銭であ
る。この機を逃がすならば少しの損をするゆえ早速に申し込もう
と思う。大急ぎで十五円八十銭を送っていただけきたいというよう
な案配であつた。そのつぎにおのれの近況のそれも些々たる茶
飯事を告げる。昨日わが窓より外を眺めていたら、たくさんの烏
が一羽の鳶とたたかい、まことに勇壮であつたとか、一昨日、墨

堤を散歩し奇妙な草花を見つけた、花卉は朝顔に似て小さくえんど豌豆うに似て大きくいろ赤きに似て白く珍らしきものゆえ、根ごと抜きとり持ちかえつてわが部屋の鉢に移し植えた、とかいうようなことを送金の請求もなにも忘れてしまったかのようにのんびりと書き認めるのであった。尊父はこの便りに接して、わが子の平静な心境を思いおのれのおくせくした心を恥じ、微笑んで送金をするのである。三郎の手紙は事実そのようにうまくいった。書生たちは、われもわれもと三郎に手紙の代筆、もしくは口述をたのんだのである。金が来ると書生たちは三郎を誘って遊びに出かけ、一文もあますところなく使った。黄村の塾はそろそろと繁栄しはじめた。噂を聞いた江戸の書生たちは、若先生から手紙の書きか

たをこつそり教わりたい心から黄村に教えを求めたのである。

三郎は思索した。こんなに日に幾十人もものひとに手紙の代筆をしてやったり口述をしてやったりしていたのではとても煩に堪えぬ。いつそ上じょうし梓しようか。どうしたなら親元からたくさんのお金を送ってもらえるか、これを一冊の書物にして出版しようと考えたのである。けれどもこの出版に当つてはひとつのさしさわりのあることに気づいた。その書物を親元があがな購い熟読したなら、どういふことになるであろう。なにやら罪ふかい結果が予想できるのであつた。三郎はこの書物の出版をやめなければならなかつた。書生たちの必死の反対があつたからでもあつた。それでも三郎は著述の決意だけはまげなかつた。そのころ江戸で流行の洒落本しやれほん

を出版することにした。ほほ、うやまつてもおす、というような書きだしで能^{あた}うかぎりの悪ふざけとごまかしを書くことであつて、三郎の性格に全くぴたりと合つていたのである。彼が二十二歳のとき酔い泥屋滅茶滅茶先生という筆名で出版した二三の洒落本は思いのほかに売れた。或る日、三郎は父の蔵書のなかに彼の洒落本中の傑作「人間万事嘘は誠」一巻がまじつているのを見て、何気なさそうに黄村に尋ねた。滅茶滅茶先生の本はよい本ですか。黄村はにがり切つて答えた。よくない。三郎は笑いながら教えた。あれは私の匿^{とくめい}名ですよ。黄村は狼^{ろうばい}狽^{ばい}を見せまいとして高いせきばらいを二つ三つして、それからあたりをはばかるような低い声で問うた。なんぼもうかつたかの。

傑作「人間万事嘘は誠」のあらましの内容は、けんえん嫌厭先生とい
う年わかい世のすねものが面白おかしく世の中を渡つたことの次
第を叙したものであつて、たとえば嫌厭先生が花柳かりゆうの巷ちまたに遊ぶ
にしても或いは役者といつわり或いはお大尽を気取り或いはお忍
びの高貴のひとのふりをする。そのいかさまごとがあまりにも工
夫に富みほとんど真に近く芸者末社もそれを疑わず、はては彼自
身も疑わず、それは決して夢ではなく現在たしかに、一夜にして
百万長者になりまた一朝めざむれば世にかくれなき名優となり面
白おかしくその生涯を終るのである。死んだとたんにもかしの無
一文の嫌厭先生にかえるというようなことが書かれていた。これ
は謂いわば三郎の私小説であつた。二十二歳をむかえたときの三郎

の嘘はすでに神に通じ、おのれがこうといつわるときにはすべて真実の黄金に化していた。黄村のまえではあくまで内気な孝行者に、塾に通う書生のまえでは恐ろしい訳知りに、花柳の巷では即ち団十郎、なにがしのお殿様、なんとか組の親分、そうしてその辺に些^{さし}少^{しょう}の不自然も嘘もなかった。

そのあくるとしに父の黄村が死んだ。黄村の遺書にはこういう意味のことながら書かれていた。わしは嘘つきだ。偽善者だ。支那の宗教から心が離れれば離れるほど、それに心服した。それでも生きて居れたのは、母親のないわが子への愛のためであろう。わしは失敗したが、この子を成功させたかったが、この子も失敗しそうである。わしはこの子にわしが六十年間かかってためた粒

々の小銭、五百文を全部のこらず与えるものである。三郎はその遺書を読んでしまつてから顔を蒼くして薄笑いを浮べ、二つに引き裂いた。それをまた四つに引き裂いた。さらに八つに引き裂いた。空腹を防ぐために子への折檻せつかんをひかえた黄村、子の名声よりも印税が気がかりでならぬ黄村、近所からは土台下に黄金の一ぱいつまつた甕かめをかくしていると囁ささやかれた黄村が、五百文の遺産をのこして大往生をした。嘘の末路だ。三郎は嘘の最後っ屁ぺの我慢できぬ悪臭をかいだするような気がした。

三郎は父の葬儀を近くの日蓮宗のお寺でいとなんだ。ちよつと聞くと野蛮なリズムのように感ぜられる和尚のめつた打ちに打ち鳴らす太鼓の音も、耳傾けてしばらく聞いていると、そのリズム

の中にどうしようもない憤怒と焦慮とそれを茶化そうというやけくそなお道化とを聞きとることができたのである。紋服を着て珠^{じゆ}数^{ゆず}を持ち十人あまりの塾生のまんなかに背を丸くして坐つて、三尺ほど前方の畳のへりを見つめながら三郎は考える。嘘は犯罪から発散する音無しの屁だ。自分の嘘も、幼いころの人殺しから出発した。父の嘘も、おのれの信じきれない宗教をひとに信じさせた大犯罪から絞り出された。重苦しくてならぬ現実を少しでも涼しくしようとして嘘をつくのだけでも、嘘は酒とおなじようにだんだんと適量がふえて来る。次第次第に濃い嘘を吐いていつて、切磋^{せつさ}琢磨^{たくま}され、ようやく真実の光を放つ。これは私ひとりの場合に限ったことではないようだ。人間万事嘘は誠。ふとその言葉が

いまはじめて皮膚にべつとりくつついて思い出され、苦笑した。ああ、これは滑稽の頂点である。黄村の骨をていねいに埋めてやっつてから三郎はひとつ今日より嘘のない生活をしてやろうと思いたった。みんな秘密な犯罪を持っているのだ。びくつくことはない。ひけめを感じずることはない。

嘘のない生活。その言葉からしてすでに嘘であった。美きものを美し^よと言ひ、悪^あしきものを悪^あしという。それも嘘であった。だいいち美きものを美しと言ひだす心に嘘があろう。あれも汚い、これも汚い、と三郎は毎夜ねむられぬ苦しみをした。三郎はやがてひとつの態度を見つけた。無意志無感動の痴呆^{ちほう}の態度であった。風のように生きることである。三郎は日常の行動をすべて曆にま

かせた。曆のうらないにまかせた。たのしみは、夜夜、夢を見ることであつた。青草の景色もあれば、胸のときめく娘もいた。

或る朝、三郎はひとりで朝食をとつていながらふと首を振つて考え、それからぱちつと箸はしをお膳のうえに置いた。立ちあがつて部屋をぐるぐる三度ほどめぐり歩き、それから懐手して外へ出た。無意志無感動の態度がうたがわしくなつたのである。これこそ嘘の地獄の奥山だ。意識して努めた痴呆がなんで嘘でないことがあろう。つとめればつとめるほど私は嘘の上塗りをして行く。勝手にしやがれ。無意識の世界。三郎は朝っぱらから居酒屋へ出かけたのである。

縄のれんをはじいて中へはいると、この早朝に、もうはや二人

の先客があつた。驚くべし、仙術太郎と喧嘩次郎兵衛の二人であつた。太郎は卓の東南の隅にいて、そのしもぶくれのもち肌の頬を酔いでうす赤く染め、たらりと下つた口鬚くちひげをひねりひねり酒を呑んでいた。次郎兵衛はそれと相對して西北の隅に陣どり、むくんだ大きい顔に油をぎらぎら浮かせ、杯を持った左手をうしろから大廻しにゆつくり廻して口もとへ持つていつて一口のんでは杯を目の高さにささげたまましばらくぼんやりしているのである。三郎は二人のまんなかに腰をおろして酒を呑みはじめた。三人はもとより旧知の間柄ではない。太郎は細い眼を半分とじながら、次郎兵衛は一分間ほどかかつてゆつたりと首をねじむけながら、三郎はきよきよ落ちつかぬ狐の眼つきを使いながら、それぞ

れほかの二人の有様を盗み見していたわけである。酔いがだんだん発して来るにつれて三人は少しずつ相寄った。三人のこらえにこらえた酔いが一時に爆発したとき三郎がまず口を切った。こうして一緒に朝から酒を呑むのも何かの縁だと思えます。ことにも江戸は半丁あるくと他郷だと言われるほどの籠こみあつたところなのに、こうしてせまい居酒屋に同日同時刻に落ち合せたというのは不思議なくらいです。太郎は大きいあくびをしてから、のろのろ答えた。おれは酒が好きだから呑むのだよ。そんなに人の顔を見るなよ。そう言つて手拭いで頬ほ被おりした。次郎兵衛は卓をとんとたたいて卓のうえにさしわたし三寸くらい深さ一寸くらいのくぼみをこしらえてから答えた。そうだ。縁と言えば縁じゃ。お

れはいま牢屋から出て来たばかりだよ。三郎は尋ねた。どうして牢屋へはいったのです。それは、こうじゃ。次郎兵衛は奥のしれぬようなぼそぼそ声でおのれの半生を語りだした。語り終えてから涙を一滴、杯の酒のなかに落してぐつと呑みほした。三郎はそれを聞いてしばらく考えごとをしてから、なんだか兄者人あにじゃびとのような気がすると前置きをして、それから自身の半生を嘘にならないように嘘にならないように気にしいしい一節ずつ口切つて語りだしたのである。それをしばらく聞いているうちに次郎兵衛は、おれにはどうも判らんじゃ、と言つてうとうと居眠りをはじめた。けれども太郎は、それまでは退屈そうにあくびばかりしていたのを、やがて細い眼をはつきりひらいて聞き耳をたてはじめたので

ある。話が終ったとき、太郎は頬被りをたいぎそうにとって、三郎さんとか言ったが、あなたの気持ちはよく判る。おれは太郎と言つて津軽のもんです。二年まえからこうして江戸へ出てぶらしています。聞いて下さるか、とやはり眠たそうな口調で自分のいままでの経歴をこまごまと語つて聞きせた。だしぬけに三郎は叫んだ。判ります、判ります。次郎兵衛はその叫び声のために眼をさましてしまった。濁つた眼をぼんやりあけて、何事ですか、と三郎に尋ねた。三郎はおのれの有頂天に氣づいて恥かしく思つた。有頂天こそ嘘の結晶だ、ひかえようと無理につとめたけれど、酔いがそうさせなかつた。三郎のなまなかの抑制心がかえつて彼自身にはねかえつて来て、もうはややくそになり、どうにでも

なれと口から出まかせの大嘘を吐いた。私たちは芸術家だ。そういう嘘を言つてしまつてから、いよいよ嘘に熱が加つて来たのであつた。私たち三人は兄弟だ。きょうここで逢つたからには、死ぬるとも離れるでない。いまにきつと私たちの天下が来るのだ。

私は芸術家だ。仙術太郎氏の半生と喧嘩次郎兵衛氏の半生とそれから僭越せんえつながら私の半生と三つの生きかたの模範かえんを世人に書いて送つてやろう。かまうものか。嘘の三郎の嘘の火焰かえんはこのへんからその極点に達した。私たちは芸術家だ。王侯といえども恐れない。金銭もまたわれらに於いて木葉の如く軽い。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年7月3日公開

2005年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ロマネスク

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>